走り読み文学探訪リバイバル(その10)

「フロント・ランナー」(THE FRONT RUNNER)

著者　パトリシア.ネル.ウォーレン/Patricia Nell Warren (C)1974(北丸雄二訳)

第三書館(1990.10.1発行)1,800円(390p)　　紹介者：榎本博康

［紹介］

1974年12月10日，ニューヨーク州は前夜の大雪で白く眩しい。プレスコット大の学長ジョーは，長距離走コーチのハーランを待っていた。オレゴン大を退学になった３人が，この大学に来たがっていると。実は，３人はゲイであり，すばらしい素質に恵まれたランナーである。ハーランはコーチとしての夢が膨らむ。

なぜ３人はハーランを選んだのか。それは彼もまたゲイであるからだ。そして３人のひとり，ビリー・シーヴと愛を結び，やがて結婚する。それが彼らにとって自然だからだ。シーヴはランナーとして成長し，モントリオール・オリンピックに10,000mと5,000mの２種目で出場する。

［感想］

これは純愛小説である。

我々は数々の純愛小説を持っている。そしてお決まりの設定として，純愛小説には愛を深めるための障害が必要である。「ロミオとジュリエット」では家同士の確執，谷崎潤一郎の「春琴抄」では，佐吉は自分の目をつぶして，春琴と同じ盲目となることで愛が成就する。この本ではゲイであることへの差別である。

所で作者は女性である。前に紹介した「カリフォルニア物語」の吉田秋生も女性だが，共に1970年代初めの作品である。共通の時代背景を持つこともあるが，この小説は少女マンガを感じさせる。３人のランナーは極めてセクシーであり，それがゲイに由来することを知らない女の子達は，彼らに熱をあげる。彼らの踊るダンスは爆発寸前のエロスだ。

作者は前書きに，「スポーツ界における／人権を闘うすべてのアスリートたちに／そして，あるパーティで出逢い／私に本書を書くアイディアを与えてくれた／ひとりの若いゲイのランナーに捧ぐ」と書いた。本書はゲイを扱いながら，それに止まらず，差別され，迫害される少数者の問題としての普遍性を持っている。

しかし，その普遍性も，ゲイを描ききってこそ出てくるものだ。作者はどうしてゲイの生活，感情，愛情を十二分に描くことができたのだろうか。さらに彼らの性行為を美しく表現できたのだろうか。作者のゲイの人間性への深い洞察と共感が無ければ不可能である。

アメリカの歴史とは，マイノリティーの歴史として見れば，「黒人解放(19世紀，ただし継続中)」，「女性解放(ウーマン・リブ，1960年代)」そして「同性愛主義者の市民権運動(1970年代)」と続く。そして現在は「エイズ患者」だ。エイズは当初，同性愛に固有のものとみなされていた。本書は同性愛文学の古典だそうだが，エイズ無き幸せな時代の作品である。

そうそう，ランニングの話をしなければいけない。

フロント・ランナーとは，競馬で言えば先行馬のことだ。スタートから跳び出して，そのままゴールまで走りきって勝利する，シーヴのことだ。一方，追い込み型はキッカーと呼ばれる。シーヴはあらゆる偏見と罵倒の中，ゲイの市民権運動の先頭を走る象徴となっていく。しかしそんなことはさて置いても，彼は絵になるのだ。身長1.8ﾒｰﾄﾙ，体重63ｷﾛ，天性の長距離ランナーの長い足，茶色の巻き毛，澄んだ，青みがかったグレーの瞳。そんなシーヴがトラックで先頭を走る。まさにぞくぞくする姿だ。

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

パトリシア･ウォーレンのフロント･ランナー３部作
左右の２冊は邦訳されている

さて，なぜ作者は長距離ランナーをゲイの象徴にしたのだろうか。ゲイは女装嗜好者とは異なる。また女性的とは限らない。映画ポリスアカデミーにはブルーオイスターというゲイ専門の酒場が出てくるが，筋肉モリモリのゲイ達がたむろしている。ゲイは心の問題で外見ではないのだ。

それでもやっぱり，マッチョな短距離走者よりは，やせ形の長距離走者がイメージに合う。長距離走は，実力が同等であれば，心理面で強い者が勝つ。ハーランの愛を支えとしてトップを走るシーヴは，ゲイの愛が純真なものであることを強くアピールする。それはトラックを25周する，持続し高め続ける純愛である。

本書は翻訳が丁寧だ。また，からだに「躯」という字をあてている。人間の躯は駆けるためのものであることを強調したかったのだろうか。

(1997.12.15)

[リバイバル感想]

私の一生の中で、その日から世界が変わる、という経験を幾つかしてきた。その最初は核兵器だ。それ自体は生まれる前に開発されていたが、人間の手による地球生命の絶滅という具体的なシナリオを手に入れてしまったという恐怖が、それ以来意識の片隅に常にあり続けている。

その次がAIDSだったとしよう、持って行きかたが強引だが。この感染症は長い潜伏期間を持つ、厄介なものだ。AIDSワクチン開発協会HPによれば、1981年に最初の患者が発見され、1983年に原因ウィルスが判明した。最初は同性愛者に多かったことから、彼らに固有の病気と考えられていた時代もあった。AIDSは未だ完全には克服できていないので、AIDS以降の同性愛者を描く小説には、この病気の陰がどうしてもつきまとう。つまりこの小説はAIDS無き時代の貴重なロマンスである。

そして病気という意味では、現在は新型コロナウィルスによるパンデミックの恐怖の中にいる。これは飛沫感染なので、気をつけると言っても限度がある。そこでスティホーム、私もただいま在宅執務中である。特に音楽系の活動が影響を受けている。多くの人々が集まって楽しんでいたことが、既に遠い過去のようになってしまった。マラソン大会も運営方法が変わるだろう。失って、初めて分かる愛おしい日常。今ある日々を大切にしたい。

2002年5月　サンディエゴにて（矢印の先に旗が）
LGBT運動の象徴の６色のレインボーフラッグ

本書の主題の方がおろそかになってしまった。米国ではレインボーフラッグを見かけることが多いが、彼らもまた、人権運動を繰り広げている。本書は彼らの理解の入り口にもなるだろう。　[2020.6.08]

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.